

# 演習ミクロ経済学 I 第 2 回 解答\*

2017 年 4 月 18 日

## 問題 1

(a) この効用関数は連続ではない。

**証明.** 距離概念として絶対値を用いる.  $x = 1, \varepsilon = 1$  とする. 任意に  $\delta > 0$  を選ぶ.  $x' = x + \frac{\delta}{2}$  とすると,

$$|x' - x| = \left| x + \frac{\delta}{2} - x \right| = \frac{\delta}{2} < \delta$$

となるので,  $x' \in B_\delta(x)$  である. 一方,

$$|u(x') - u(x)| = \left| \left( x + \frac{\delta}{2} + 1 \right) - x \right| = \frac{\delta}{2} + 1 > 1 = \varepsilon$$

となるので,  $u(x') \notin B_\varepsilon(u(x))$  である. したがって  $u$  は連続ではない. □

(b) この効用が表す選好は連続である.

**証明.** まず  $u$  が厳密な増加関数であることを示す. 任意に  $x^1 < x^2$  を満たす  $x^1, x^2 \in \mathbb{R}_+$  を選ぶ.  $x^1 < x^2 \leq 1$ ,  $x^1 \leq 1 < x^2$ ,  $1 < x^1 \leq x^2$  の 3 ケースを考える.

(i)  $x^1 < x^2 \leq 1$  のとき

$u$  の定義から,  $u(x^1) = x^1 < x^2 = u(x^2)$  となる.

(ii)  $x^1 \leq 1 < x^2$  のとき

$u$  の定義から,  $u(x^1) = x^1 < x^2 + 1 = u(x^2)$  となる.

(iii)  $1 < x^1 \leq x^2$  のとき

$u$  の定義から,  $u(x^1) = x^1 + 1 < x^2 + 1 = u(x^2)$  となる.

したがって  $u$  は厳密な増加関数である.

このことを使って選好が連続であることを示す. 任意に  $x^1 \in \mathbb{R}_+$  を選ぶ.  $u$  が選好を表すので,  $x^1 \succsim x^2 \iff u(x^1) \geq u(x^2)$  である.  $u$  は厳密な増加関数なので,  $u(x^1) \geq u(x^2)$  を満たす  $x^2$  は  $[x^1, +\infty)$  に含まれ,  $u(x^1) \leq u(x^2)$  を満たす  $x^2$  は  $[0, x^1]$  に含まれる. すなわち,

---

\* 間違いを見つけたら orihsamuk@gmail.com まで連絡してください.

$$\{x^2 \in \mathbb{R}_+ \mid x^1 \succsim x^2\} = [x^1, +\infty)$$

$$\{x^2 \in \mathbb{R}_+ \mid x^1 \precsim x^2\} = [0, x^1]$$

である。これらがいずれも  $\mathbb{R}_+$  において閉集合であることを示せばよい。以下では距離概念として絶対値を用いる。

$[x^1, +\infty)$  が  $\mathbb{R}_+$  において閉集合であることを示す。各  $k = 1, 2, \dots$  について  $x^k \in [x^1, +\infty)$  であり、 $\bar{x} \in \mathbb{R}_+$  に収束する数列  $\{x^k\}_{k=1}^\infty$  を任意に選ぶ。背理法の仮定として  $\bar{x} \notin [x^1, +\infty)$  とする。これは  $\bar{x} < x^1$  を意味する。 $\{x^k\}_{k=1}^\infty$  が  $\bar{x}$  に収束することから、任意の  $\varepsilon > 0$  に対してある自然数  $\bar{k}$  が存在し、任意の  $k \geq \bar{k}$  について  $x^k \in B_\varepsilon(\bar{x})$  を満たす。 $\varepsilon > 0$  は任意なので、 $\varepsilon \equiv \frac{x^1 - \bar{x}}{2}$  とすると  $x^k \in B_\varepsilon(\bar{x})$  より、

$$|x^k - \bar{x}| < \varepsilon \iff \bar{x} - \varepsilon < x^k < \bar{x} + \varepsilon \Rightarrow x^k < \bar{x} + \varepsilon = \frac{x^1 + \bar{x}}{2} < x^1$$

となり、 $x^k \notin [x^1, +\infty)$  が成り立つが、これは  $\{x^k\}_{k=1}^\infty$  の作り方に矛盾する。

$[0, x^1]$  が  $\mathbb{R}_+$  において閉集合であることを示す。各  $k = 1, 2, \dots$  について  $x^k \in [0, x^1]$  であり、 $\bar{x} \in \mathbb{R}_+$  に収束する数列  $\{x^k\}_{k=1}^\infty$  を任意に選ぶ。背理法の仮定として  $\bar{x} \notin [0, x^1]$  とする。全体集合を  $\mathbb{R}_+$  に限定していることから、これは  $\bar{x} > x^1$  を意味する。 $\{x^k\}_{k=1}^\infty$  が  $\bar{x}$  に収束することから、任意の  $\varepsilon > 0$  に対してある自然数  $\bar{k}$  が存在し、任意の  $k \geq \bar{k}$  について  $x^k \in B_\varepsilon(\bar{x})$  を満たす。 $\varepsilon > 0$  は任意なので、 $\varepsilon \equiv \frac{\bar{x} - x^1}{2}$  とすると  $x^k \in B_\varepsilon(\bar{x})$  より、

$$|x^k - \bar{x}| < \varepsilon \iff \bar{x} - \varepsilon < x^k < \bar{x} + \varepsilon \Rightarrow x^k > \bar{x} - \varepsilon = \frac{x^1 + \bar{x}}{2} > x^1$$

となり、 $x^k \notin [0, x^1]$  が成り立つが、これは  $\{x^k\}_{k=1}^\infty$  の作り方に矛盾する。□

## 問題 2

$$(1) \mathbf{x}^1 \succsim \mathbf{x}^0 \iff x_1^1 x_2^1 \geq x_1^0 x_2^0$$

強単調性：満たす

**証明.**  $\mathbf{x}^1 > \mathbf{x}^0$ , すなわち  $x_1^1 \geq x_1^0$  かつ  $x_2^1 \geq x_2^0$ ,  $\mathbf{x}^1 \neq \mathbf{x}^0$  を満たす  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^0 \in \mathbb{R}_+^2$  を任意に選ぶ。 $x_1^1 = 0$  または  $x_2^1 = 0$  のとき、 $x_1^1 x_2^1 = x_1^0 x_2^0$  となり、 $\mathbf{x}^1 \succsim \mathbf{x}^0$  が成り立つ。 $x_1^1 > 0$  かつ  $x_2^1 > 0$  のとき、 $x_1^1 x_2^1 > x_1^0 x_2^0$  となり、 $\mathbf{x}^1 \succ \mathbf{x}^0$  が成り立つ。

次に  $\mathbf{x}^1 \gg \mathbf{x}^0$ , すなわち  $x_1^1 > x_1^0$  かつ  $x_2^1 > x_2^0$  を満たす  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^0$  を任意に選ぶ。このとき  $x_1^1 x_2^1 > x_1^0 x_2^0$  が成り立つので  $\mathbf{x}^1 \succ \mathbf{x}^0$  かつ  $\mathbf{x}^0 \not\prec \mathbf{x}^1$  となり、 $\mathbf{x}^1 \succ \mathbf{x}^2$  が従う。□

強凸性：満たす

**証明.**  $\mathbf{x}^1 \succsim \mathbf{x}^0$  と  $\mathbf{x}^1 \neq \mathbf{x}^0$  を満たす  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^0 \in \mathbb{R}_+^2$  と  $t \in (0, 1)$  を任意に選ぶ。 $\mathbf{x}^0$  と  $\mathbf{x}^1$  を  $t$  により凸結合した消費プランを  $\mathbf{x}^t$  と書くと、

$$\begin{aligned} \mathbf{x}^t &= t\mathbf{x}^0 + (1-t)\mathbf{x}^1 = (tx_1^0, tx_2^0) + ((1-t)x_1^1, (1-t)x_2^1) \\ &= (tx_1^0 + (1-t)x_1^1, tx_2^0 + (1-t)x_2^1) \end{aligned}$$

となる.  $t \in (0, 1)$  より,  $x_1^t > x_1^0$  かつ  $x_2^t > x_2^0$  である. よって,  $x_1^t x_2^t > x_1^0 x_2^0$  が成り立つので  $\mathbf{x}^t \succ \mathbf{x}^0$  かつ  $\mathbf{x}^0 \not\succ \mathbf{x}^t$ , すなわち  $\mathbf{x}^t \succ \mathbf{x}^0$  が従う.  $\square$

$$(2) \mathbf{x}^1 \succ \mathbf{x}^0 \iff x_1^1 - x_2^1 \geq x_1^0 - x_2^0$$

強単調性: 満たさない

**証明.**  $\mathbf{x}^1 = (3, 3)$ ,  $\mathbf{x}^0 = (2, 1)$  とすると,  $\mathbf{x}^1 \gg \mathbf{x}^0$  である. しかし,

$$x_1^1 - x_2^1 = 0 < 1 = x_1^0 - x_2^0$$

より  $\mathbf{x}^0 \succ \mathbf{x}^1$  となるので,  $\mathbf{x}^1 \succ \mathbf{x}^0$  を満たさない.  $\square$

強凸性: 満たさない

**証明.**  $\mathbf{x}^1 = (3, 3)$ ,  $\mathbf{x}^0 = (1, 1)$ ,  $t = 0.5$  とすると,  $x_1^1 - x_2^1 > x_1^0 - x_2^0$  を満たすので  $\mathbf{x}^1 \succ \mathbf{x}^0$  であり, 当然  $\mathbf{x}^1 \neq \mathbf{x}^0$  である. ところが,  $tx_1^1 + (1-t)x_1^0 = 2$ ,  $tx_2^1 + (1-t)x_2^0 = 2$  なので

$$x_1^t - x_2^t = 2 - 2 = 0 = x_1^0 - x_2^0$$

となり,  $\mathbf{x}^t \not\succ \mathbf{x}^0$  が従う. よって  $\mathbf{x}^t \succ \mathbf{x}^0$  は成り立たない.  $\square$

$$(3) \mathbf{x}^1 \succ \mathbf{x}^0 \iff \min\{x_1^1, x_2^1\} \geq \min\{x_1^0, x_2^0\}$$

### 問題 3

この選好は局所非飽和を満たさない.

**証明.**  $x^0 = 5$ ,  $\varepsilon = 1$  とする. 距離概念を絶対値とし, 任意に  $x^1 \in B_\varepsilon(x^0)$  を選ぶと,

$$|x^1 - x^0| < \varepsilon \iff x^0 - \varepsilon < x^1 < x^0 + \varepsilon \iff 4 < x^1 < 6$$

が成り立つ. すると,  $u(x^1) \leq 0 = u(x^0)$  となる.  $u$  が選好を表現しているので,  $u(x^1) \leq u(x^0) \iff x^1 \preceq x^0$  となり, 局所非飽和を満たさない.  $\square$

### 問題 4

**証明.** 任意に  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in \mathbb{R}_+^2$  と  $t \in [0, 1]$  を選び,  $\mathbf{x}^t \equiv tx_1 + (1-t)x_2$  と書くと,

$$f(\mathbf{x}^t) = \min\{x_1^t, x_2^t\} = \min\{tx_1^1 + (1-t)x_1^2, tx_2^1 + (1-t)x_2^2\}$$

である. 一方, 任意の  $i = 1, 2$  について  $f(\mathbf{x}^i) = \min\{x_1^i, x_2^i\}$  が成り立つことから,

$$\begin{cases} f(\mathbf{x}^i) \leq x_1^i \\ f(\mathbf{x}^i) \leq x_2^i \end{cases} \Rightarrow tf(\mathbf{x}^i) + (1-t)f(\mathbf{x}^i) = f(\mathbf{x}^i) \leq tx_1^i + (1-t)x_2^i$$

となる. よって

$$\min\{f(\mathbf{x}^1), f(\mathbf{x}^2)\} \leq \min\{tx_1^1 + (1-t)x_2^1, tx_1^2 + (1-t)x_2^2\}$$

が成り立つ<sup>\*1</sup>。したがって、

$$f(\mathbf{x}^t) = \min\{tx_1^1 + (1-t)x_2^1, tx_1^2 + (1-t)x_2^2\} \geq \min\{f(\mathbf{x}^1), f(\mathbf{x}^2)\}$$

を得る。 □

## 問題 5

⇒ の証明.  $f$  が準凹関数であると仮定し、集合  $S(y)$  を

$$S(y) \equiv \{x' \in \mathbb{R}_+^2 \mid f(\mathbf{x}') \geq y\}$$

と定義する。任意に  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}_+^2$  を選び、 $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in S(f(\mathbf{x}))$  と  $t \in [0, 1]$  を任意にとる。  $\mathbf{x}^t \equiv t\mathbf{x}^1 + (1-t)\mathbf{x}^2$  とする。  $\mathbf{x}^t \in S(f(\mathbf{x}))$ , つまり  $f(\mathbf{x}^t) \geq f(\mathbf{x})$  が示せればよい。

$f$  が準凹関数であることから、

$$f(\mathbf{x}^t) \geq \min\{f(\mathbf{x}^1), f(\mathbf{x}^2)\}$$

が成り立つが、 $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in S(f(\mathbf{x}))$  なので  $f(\mathbf{x}^1) \geq f(\mathbf{x})$  かつ  $f(\mathbf{x}^2) \geq f(\mathbf{x})$  である。すなわち  $\min\{f(\mathbf{x}^1), f(\mathbf{x}^2)\} \geq f(\mathbf{x})$  となるので  $f(\mathbf{x}^t) \geq f(\mathbf{x})$  が従う。 □

⇐ の証明. 任意の  $y \in \mathbb{R}$  に対し、 $S(y) = \{\mathbf{x}' \in \mathbb{R}_+^n \mid f(\mathbf{x}') \geq y\}$  が凸集合だと仮定する。任意に  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in \mathbb{R}_+^n$  を選ぶ。一般性を失わず、

$$f(\mathbf{x}^1) \geq f(\mathbf{x}^2) \tag{1}$$

だとする。  $\mathbf{x}^2 \in S(f(\mathbf{x}^2))$  が成り立つことに注意すると、(1) より  $\mathbf{x}^1 \in S(f(\mathbf{x}^2))$  も成り立つ。  $S(y)$  は任意の  $y \in \mathbb{R}$  に対し凸集合なので、 $S(f(\mathbf{x}^2))$  も凸集合である。よって任意の  $t \in [0, 1]$  について、  $\mathbf{x}^t = t\mathbf{x}^1 + (1-t)\mathbf{x}^2$  とすると  $\mathbf{x}^t \in S(f(\mathbf{x}^2))$  となる。これは  $f(\mathbf{x}^t) \geq f(\mathbf{x}^2)$  を意味するので  $f(\mathbf{x}^t) \geq \min\{f(\mathbf{x}^1), f(\mathbf{x}^2)\}$  を得る。 □

---

<sup>\*1</sup> 一般に、 $a \leq A$  かつ  $b \leq B$  が成り立つとき、 $\min\{a, b\} \leq \min\{A, B\}$  となります。チェックしてみてください。